〈報告論文再録〉

「私なりのオーストラリア的視点で見る[1)]」
――パーシー・グレインジャーとメルボルン大学グレインジャー博物館――

アストリッド・ブリット・クラウトシュナイダー
（宮澤淳一訳）

1880-90 年代というパーシー・グレインジャー（1882-1961）の幼少期は、発展途上の文化、特にオーストラリアの文化において、自己意識の強い表現が生まれつつあった時代に位置する。まさにこの国では、オーストラリアン・ネイティヴ・アソシエーション (Australian Native Association) ――オーストラリア生まれの白人のための協会――といった集団による激しいキャンペーン運動が進行中で、英国的な規則の権威を払いのけ、西洋国家としてのオーストラリアのアイデンティティを独自のものとして打ち立てようとしていたのである。そのような状況で、オーストラリアの芸術家の多くが自分たちの芸術を通して国民に与えようとしたのは、オーストラリア的な風景にまったく依拠しながら、同時に西洋芸術・文化の伝統の中にそれを揺るぎなく定位させる新しい神話だった[2)]。

すると、次の 2 点は驚くには値しない。すなわち、パーシー・グレインジャーが、幼い頃からオーストラリアの文化的発展の領域において進行していた大きな変化を感じ取っていたこと、そして、20 世紀最初の数年間にロンドンに音楽活動の拠点を築くまでに（**図 1**）、彼自身がオーストラリアの芸術的成長においてきわめて重要な役割を担うことになるという確信を得ていたことの 2 点である。そして、1920 年代なかばまでに、グレインジャーは自分が創作力の頂点にあると感じていた。1926 年のオーストラリアへの（極端なほどの成功を収めた）演奏旅行からニューヨークに戻ってくると、彼はこう書いた――

1） "Seeing things in my Australian way," cited in Percy Grainger to Balfour Gardiner, December 25, 1933, Grainger Museum collection, University of Melbourne.

2） Astrid Krautschneider, 'Visual Culture in Colonial Australia', (paper presented at annual School of Art History, Cinema, Classics and Archaeology conference, University of Melbourne, 2003). Also Geoffrey Serle, *The Creative Spirit in Australia: A Cultural History* (Melbourne: Heinemann, 1987), 60-1.

もちろん私は、自分が今日のオーストラリア全体において唯一の素晴らしい音楽家（only really wonderful musician）であることをわかっていました。真に創造的な作曲家がその音楽の炎を公衆の目の前で燃やした最初の時であったこともわかっていました[3)]。

ご存じのように、グレインジャーがオーストラリアに暮らしたのは生まれたときからの13年にすぎない。しかし、それにもかかわらず、自分が本質的にオーストラリア人であるというグレインジャーの自意識は、生涯を通じて実にさまざまな形態で現われた。そのいくつかはきわめて繊細なものであり、例えば、自分の出版譜の表紙のデザインのモチーフにユーカリの葉（gumleaf）をあしらうことを繰り返したことが挙げられるが[4)]（**図2**）、このデザインはオーストラリア人以外にはピンとこなかったであろう。

あるいは、もっとわかりやすいものとしては、「典型的なオーストラリア的な」作品を解説するときのそのやり方がそうである。例えば《コロニアル・ソング》のプログラム・ノーツで彼はこう書いている——

わが母国（オーストラリア）の風景や人々を思うときに呼び覚まされる感情を表現したい、そしてまた、現地で生まれた植民地住民（Colonials）全般において、決して異色ではないであろうある種の情緒を声にしたい、と思って作った曲である[5)]。

もしかしたら、彼の「オーストラリア性」に基づく最も目覚ましい宣言は、出身の

3）Percy Grainger, "P.G.'s Powers during Australian Tour of 1926," November 30-December 1, 1926, Grainger Museum collection, University of Melbourne (emphasis added). 訳注：原文は以下のとおり—— "Of course I knew I was the only really wonderful musician in all Australia at the time. I knew it was the first time that a truly begetsome [creative] tonewright [composer] had kindled the flame of his own toneart [music] before the very public eye." ブラケット内はクラウトシュナイダーによる補記。ラテン語由来の言葉を排除するために開発したグレインジャー独自の用語で構成されていることがわかる。

4）グレインジャーの出版物の多くがこうしたモチーフをあしらった。いくつかは緑色と金色の表現にすら転じた（この2色はオーストラリアのナショナル・カラーで、スポーツの世界でよく見られる）。例えばこの**図2**に掲げられた《アイルランド、デリー州の調べ》（*Irish Tune from County Derry*）の1917年版（ニューヨークのシャーマー刊）がそうである。

5）Percy Grainger, 'Long Program Note' in the first Australian edition of *Colonial Song* (Melbourne: Allan & Co., 1921).

メルボルン市に自分に捧げる博物館を創設するという決意だったのかもしれない。「音楽的天才」（はっきり言えば「オーストラリアの音楽的天才」）の創造的な側面を強調する博物館という構想は、1922 年、母ローズが命を落とした直後に友人のバルフォア・ガーディナーに宛てた手紙の中に初めて現われる。

> ［……］親密な大小の手紙類はすべて、オーストラリアン・グレインジャー博物館なるものに預けるべきだろう。場所は私の生まれた町メルボルンがいい[6]。

それから構想を温め、メルボルン大学に提案を持ち込むのに 10 年はかからなかった。好ましいことに、当時の副総長サー・ジェイムズ・バレットは、メルボルンの音楽・芸術の熱心な擁護者だった。1933 年にバレットに宛てた手紙でグレインジャーは構想を語っている——

> メルボルン大学と私がこのように相互に満足のできる美的な接触を取り始めたと感じられるに到れるならば、私はたいへん嬉しく存じます。この接触によって、文化的な視点から価値があると私の考える品物や［……］諸国で活躍するオーストラリア人音楽家としての私ならではの姿勢をよく示す品物を提供できる場所としてこの大学を見なすことができるのです。私にとって価値のあった書籍などには、ヨーロッパよりもメルボルンに送り届けるべきだと思いたいものがあるのです[7]。

バレットの推薦で、提案は大学評議会に持ち込まれたが、ちなみに、評議会員の中から小さな反発が起こった。それは、皮肉にも、パーシー・グレインジャーがもはやオーストラリア人ではない、という声だった。グレインジャーはその声に愛想良く対応した——

> 私がアメリカ市民権を持っているために反対の声が上がったらしいという話は、あり得ないとも理不尽だとも私は思いません。結局これは、いくつかの切り口か

6） Percy Grainger to Balfour Gardiner, May 3, 1922, Grainger Museum collection, University of Melbourne.

7） Percy Grainger to Sir James Barrett, January 2, 1933, Grainger Museum collection, University of Melbourne.

ら見ることのできるパブリックな問いかけだからです[8]。

大学は提案を受け入れ、大学の建築技師であるガウラー（Gawler）とドラモンド（Drummond）をグレインジャーに委ねた。かくして博物館建設の作業が始まった。1935年に中央のホワイエと2つの正面ギャラリーから成る第1セクションが完成。3番目のギャラリーが企画された。既存の部分に直角に交わる形でホワイエの裏側に拡がり、2つの小さな部屋がこれらのギャラリーをつなぐというものだった。しかし、グレインジャーの案は常に変化し、発展し続け、デザインは幾度かの変容を遂げた（**図3**）。

グレインジャーは1938年8月にオーストラリアを再訪し、博物館の最終段階に着手した。学芸員を指名し、備品を調達し、11月と12月のあいだの建築作業のあいだ、そこにいた。労働者たちに混じって現場で働いたことすらある（もっとも主に写真撮影のためであったが）。サー・ジェイムズ・バレットが主宰した正式の開館式は1938年12月10日に催されたが、建物はまだ完成していなかった（**図4**）。

グレインジャーは博物館の開館後18ヶ月以内に米国に戻るつもりでいたが、いくつかの事件が起こり、それを妨げた。その最初のものは第二次世界大戦であり、実際に旅行が困難になったばかりか、博物館の建物自体が倉庫にさせられた（大学の他の建物も同様に戦争のために収用された）。その当時、舞台装置から建材まで、あらゆる物資が詰め込まれた。戦後、博物館の建物は大学婦人会に引き渡され、児童救済基金など、戦後の避難民を救済するための仕事の拠点とされた。

その後、学芸員たちが、この博物館にとって異質なものを一掃し、秩序を回復するという（ヘラクレス的な）難業についに着手しようと思った矢先、大学総務部の中心的な建物であるウィルソン・ホールが火事にやられてしまう。1952年1月のことである。ウィルソン・ホールの地下階には大学の文具店が置かれていた。代わりの場所を探していた大学側は、案の定、グレインジャー博物館に目をつけた。

これらの出来事の最中、グレインジャーはオーストラリア訪問を何度となく企てたが、そのたびに挫折した。旅行上の制約もあったが、その後に家族の問題のほか、彼自身の健康上の問題なども生じたためである。結局、グレインジャーは、学芸員に手紙で指示をしながら博物館をみずから運営する立場から退いた。しかし、関心が衰えたわけではない。実際、1940年代後半までに、メルボルンのグレインジャー博物館こそ自分の芸術家としての住処（artistic home）であり、米国ニューヨーク州ホワイ

8）Percy Grainger to Sir James Barrett, April 30, 1933, Grainger Museum collection, University of Melbourne.

ト・プレインズの自宅は生活する（live）場所にすぎないと考えるようになっていた。妻のエラに宛てた 1948 年の手紙で、彼はこう述べている——

> 芸術家としての住処をを２つ持つのは賢明でないし、時間の無駄だ。博物館が私の芸術家としての住処でなくてはならない、とはひとえにその意味だ。他の場所では、長期にわたって生活することができるというだけのことだ[9]。

彼は、ホワイト・プレインズの邸宅からメルボルン大学に向けて、文書類や、輸送ケースに詰めたさまざまな物品を送り続け、博物館の収蔵品を根気よく追加し続けた。いずれオーストラリアに戻り、自分の博物館の業務を自分でやるつもりだったのである（**図 5**）。公式の開館から 20 年近くたった 1955 年、グレインジャーはようやく「芸術家としての住処」に戻ったのである。

帰還に伴い、膨大な量の収蔵品が到着し始め、次々に届く木製の枠箱は際限がないように思われた。大きな家具や、カンガルーの袋マシーン（Kangaroo Pouch machine）のようなフリー・ミュージックの実験楽器の多くも、そのときに博物館に収容された。

パーシーとエラはメルボルンに 9 ヶ月滞在したあと、1956 年に米国に戻った。この滞在中、グレインジャーは「この博物館の目的」という文章を書いた。そこで彼はこう主張している——

> グレインジャー博物館の収蔵品は、オーストラリアが音楽的に卓越していた時期（1880 年頃からそれ以降）の音楽作りのプロセス（音楽演奏とは区別されるものとしての）に光を当てるという主たる意図を伴って集められてきた[10]。

1880 年。この年は、オーストラリアの音楽史のほかの出来事をすべて差し置いて、グレインジャー本人の生年に近づけて選ばれたのかもしれない[11]。すると、グレイン

9） Percy Grainger to Ella Grainger, January 13, 1948, Grainger Museum collection, University of Melbourne (emphasis added).

10） Percy Grainger, “The Aims of the Grainger Museum,” October 1955, Grainger Museum collection, University of Melbourne.

11） グレインジャー博物館を扱った博士論文において、ベリンダ・ネメクは、グレインジャーは「この重要な時代の始まりとして、自分が生まれた 10 年間を選んだだけだ」と述べている。「なぜなら彼は、作曲史における自分自身の場所が、世界文化史におけるオーストラリアの場所と分かちがたく結びついていると考えていたからだ。」Belinda Nemec, “The Grainger Museum in its Museological and Historical Contexts” (PhD thesis, University of Melbourne, 2006), 249-50.

ジャーが自分の博物館に、自伝的かつ愛国主義的な意図をこめていたことがこの年からわかるということだろうか。

今日、パーシー・グレインジャーはオーストラリア初の世界的に有名な作曲家兼編曲家、国際的な名声を得たコンサート・ピアニストとして広く知られている。グレインジャー博物館とその収蔵品も、国際的な尺度で重要な文化的・学術的資産としての認識が進んでいる。1年前に改修を完了して以来、当館には数千もの訪問者があり、世界中の研究者から数百の問い合わせがある。「オーストラリアの天才」の本質を伝えるというグレインジャーの目的は、ついに達成されつつある。

'Seeing things in my Australian way': Percy Grainger and the Grainger Museum at the University of Melbourne"

by ASTRID BRITT KRAUTSCHNEIDER (Grainger Museum, University of Melbourne)

Despite Percy Grainger's strong affiliations with Northern Europe, the United Kingdom, and America – he upheld his Australian identity all his life, believing that his mission was to define and explain the nature of *Australian Genius* to the rest of the world.

Having decided in the 1930s to create a museum in Australia that would contain his belongings and life's work, Grainger acted in the awareness that his every action and achievement would be on display for perpetuity. He had, perhaps uncommonly for his generation, an acute understanding of how important an artist's social and cultural sphere is in the production of their art, and wanted his Museum to be used as a reference for others' inspiration. Grainger thus constructed his museum and attempted to document himself accordingly.

© Astrid Britt Kraustschneider, "'Seeing things in my Australian way': Percy Grainger and the Grainger Museum at the University of Melbourne," delivered at "International Symposium: Percy Grainger's Australian Sprit and Global Mind," Percy Grainger Music Festival 2011, Aoyama Gakuin University, Tokyo, November 27, 2011; revised version for proceedings in *Aoyama Journal of Cultural and Creative Studies* no.4 (vol.4, no.1, March 2012).

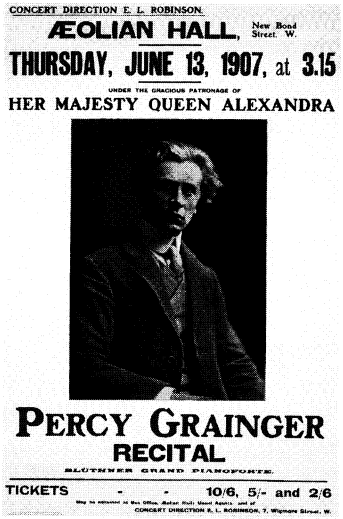

図 1　Vail & Co. (printer), London Publicity poster for a recital by Percy Grainger at the Aeolian Hall, London, Thursday, June 13, 1907. Grainger Museum collection, University of Melbourne.

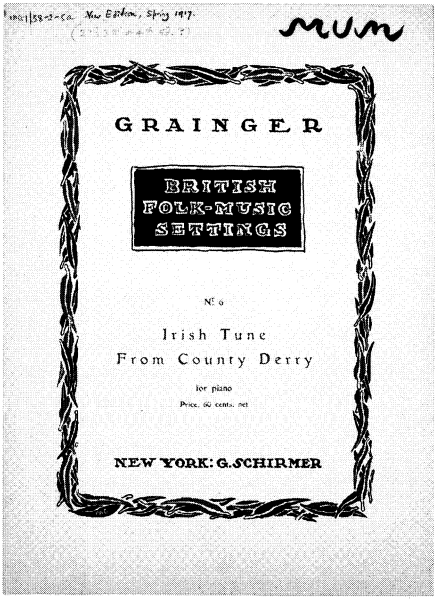

図 2　Percy Grainger, *Irish Tune from County Derry* (New York: G. Schirmer, 1917). Grainger Museum collection, University of Melbourne.

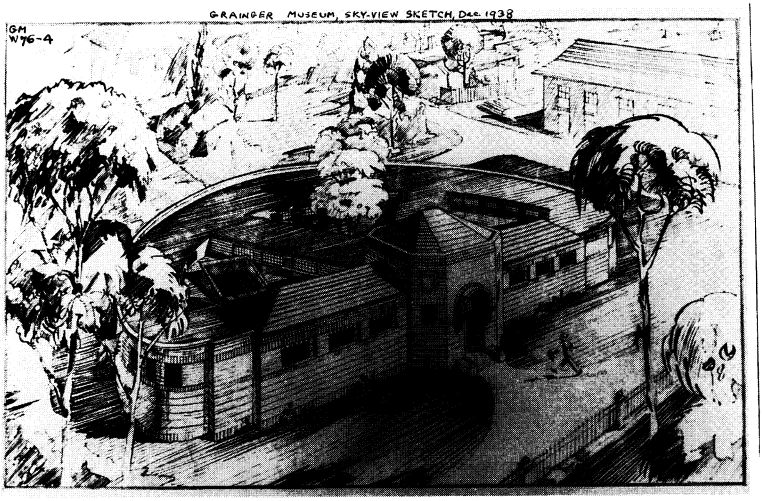

図 3　Gawler and Drummond (architects, Melbourne), *Grainger Museum, Sky View Sketch*, December 1938. Grainger Museum collection, University of Melbourne.

図 4　Ella Grainger (Melbourne), G.M. Extensions in the Making, November 8, 1938. Grainger Museum collection, University of Melbourne

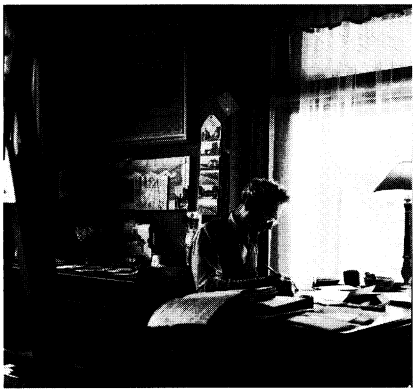

図 5　Burnett Cross (New York) , Percy Grainger at work on his museum catalogue, White Plains, 1950s. Grainger Museum collection, University of Melbourne.